

大谷観音の足下から目覚めた 栃木最古の縄文人(大谷寺洞穴遺跡)

栃木県立博物館 人文課 主任研究員 馬籠 和哉



発掘中のお堂と洞穴内の様子 栃木県立博物館蔵(辰巳四郎コレクション)

近年、日本遺産となった「石の街」大谷を訪ねて大谷公園内の平和観音から古刹・大谷寺を参詣する旅行者が多くなってきた。大きな洞穴に埋もれる様に建つお堂の奥、凝灰岩の壁に彫られた千年以上も前に作られた「千手観音菩薩立像」を拝し、さらに奥に進むと、大小様々な仏様に出会うことができる。これらの仏様は国の特別史跡と重要文化財に指定されている。

その保存修理事業が行われた1965(昭和40)年に仏様の足もと、洞穴内の発掘調査が実施された。この時、県内最古級の土器と縄文人の骨、縄文人が食べていたと

考えられる動物の骨や貝などがみつかった。ここで営まれた、およそ一万年前の暮らしの跡が明らかになった。洞穴内は地下水が豊富で、調査は水との戦いだったが、その水が他の遺跡では溶けてしまう骨や貝を守ることにした。

さて、この洞穴でみつかった縄文人は全部で六体。すべて縄文時代初期の地層からみつかったが、上部の地層からみつかった新しい人骨は五体分がまとめて葬られていた。成人女性が三体、幼児が一体、乳児が一体であった。注目すべきは下の地層からみつかったより古い時期の成人男性のものとされる一体だ。縄文人の埋葬方法はたいはい手足を折り曲げられた屈葬という方法であり、この人骨は全体が横向きの状態で、ちょうど母親の胎内にあるような状態であった。ほぼ全身の骨がそろっており、身長は154センチに復元される。当時の平均的な身長は、男性が159センチ、女性が148センチといわれていることから小柄であったようだ。頭蓋骨はしっかりとして、下顎の骨がこの時期の縄文人としてはよく発達している。さらに手足の骨をよく観察すると、左腕が細く、右腕が太くなっている。両脚の骨も同じような状態だ。この人



発掘中の人骨 栃木県立博物館蔵(辰巳四郎コレクション)

物は生前に何らかの病気に罹っていたと考えられる。

旧石器時代から縄文時代に変わるこの時期は、気候が少しずつ暖かくなり始めていた。人々は移動生活から堅穴住居のあるムラに住むようになった。一方で、大谷寺洞穴のような岩陰もまた生活の場であった。この遺跡の発見から、すでに障害のある方も支え合って暮らす社会が形作られていたことがわかる。

当館では、大谷寺洞穴遺跡の土器・石器の他に人骨から復元した縄文人の胸像を展示している。また大谷寺宝物館では、さらに多くの資料と共に発掘された状態のままの人骨を見学できる。大谷を訪れ、現地で縄文人の息吹を感じてほしいだろうか。各館の詳しい情報はホームページ等で確認してほしい。